天皇・公家・武家

村井 康彦
京都造形芸術大学

天皇・公家・武家は長らく日本社会の支配層を構成してきた。古代では公家[1]が、中世以後は武家が主体であったが、いずれの場合も天皇の存在が深く関わっていた。そこでここでは、主にこれら三者相互の関係を検討することで、日本社会の構造や特質を考えてみたい。

さて、日本の歴史を理解する上で、古い時代ほど大きな意味をもっていたのが、大陸と海で隔てられた島国であったという地理的条件である。早い話、日本では、万里長城の築造や維持に投入された中国歴代王朝のエネルギーは無用であったし、宮都（みやこ）を城壁で取り組む必要もなかった。後者についていえば、唯一の例外は後年（16世紀後半）、豊臣秀吉が京都を土塁で囲んだ「お土居（どい）」くらいのものである。大陸との交流によって異文化・先進文化を摂取することには熱心であったが（ただし渡航は困難をきわめた）、異民族と直接境を接していなかったために、民族意識[2]もほとんど育たなかった。

同様の理由で、古代国家の軍事組織として諸国に置かれた軍隊の制度も早くから無用の存在となり、奈良時代の末、８世紀には廃止された。しかも軍事を統括する役所の兵部省は、９世紀に行われた役所の統廃合（リストラ）[3]によって縮小され、わずかに儀礼に関わる機能だけが残され、事実上有名無実の存在となった。この兵部省の解体は異民族の侵入を受けることがなかった古代日本社会を特徴づける現象といってよいであろう。ただし治安警察に当たる機構として検非違使が置かれたが、京都地域に限られていた。のちには地方にも置かれているが、十分に機能しないまま、台頭する武士団の前に消滅する。

こうして国家的規模の軍事体制（役所と軍隊）が解体されたあと日本列島の各地には、武芸に長じた武者（武士）が姿を見せはじめる。「兵の家（つわものいえ）」と呼ばれたように武芸を家の業として成長してきた土豪であり、かれらを核とする地方武士団をより広い範囲でまとめ上げたのが、いわゆる武家の「棟梁（とうりょう）」で、それを全国的な規模に広げたのが、12世紀末における源頼朝による鎌倉幕府の樹立といってよいであろう。

武士団の成長には、東北日本における戦乱に関東の武士が動員され、それを統括した源氏との間に主従関係が強められたことが大きい。それを通して源氏の棟梁化も進んだ。しかしその武家の棟梁も「みやこ」にあっては公家（貴族）の私兵として傭われその護衛に当った「侍」（さむらい）の長にすぎなかった。かれらが皇族の出でありながら、このように貴族にさげすまれ、その駆使に甘んじたのにはわけがある。

その一は、地方長官として地方に下った際、土地を取得し、田舎に本拠をもったことである。こうした存在を忌避する貴族の意識－都鄙意識については、すぐあとにふれよう。

その二は、「殺人の上手」などといわれ、貴族の侍として行った殺業が、折から高まった浄土教思想によって、地獄に堕ちてしかるべき罪行為とされ、蔑視されたことである。そこであ

る武者は、道理のない殺人はやめ、道理の立つ殺人だけをすることにしたという（『保元物語』）。そうすることで罪意識を出来るだけ小さくしたというのである。

武者はその棟梁をふくめて、貴族から身分的に差別され、蔑視されてる、社会的に「負」の存在であった。それが正当に認知されるのは、武士政権として鎌倉幕府が成立して以後、中世に下ってからである。それに伴い中世には、公家（貴族）と武家の立場が逆転することになる。これ以前から進行していたが、公家の拠り所とする役所の大半が失われてしまったからであるが、この事態を理解するためには、遡って古代における貴族の存在形態を考えてみることが必要であろう。

日本の貴族の特徴を一言でいうと、それは「宮都」（みやこ）に集住する「都市貴族」であったという点にある。

日本の宮都は８世紀以後、本格的に発展したが、遷都[4]を繰り返すたびに大きくなっている。

すなわち宮都の発展は、

(1)「内廷」すなわち天皇の居所である「内裏（だいり）」の拡充整備

(2)「外廷」すなわち国家権力の中枢である役所の拡充整備

（(1)(2) が「宮」）

(3)「宮」の周辺に市街地が形成され、役人（貴族はその上層部）や庶民の集住する「京」の形成

といった姿でとらえることが出来るが、こうした「みやこ」造りの過程で留意されるのが、その早い段階で貴族に対して位に応じて家地を与え、京中での居住を促していることである。その結果、貴族たちは最初の都市民となった。それまで生活の場であった田舎の本籍地との関係を次第に希薄にし、ついには生産からも離れていったということだ。とくに宮都が長らく続いた大和（奈良県）を離れて山背（京都府）に遷ったことで、貴族はほぼ完全に田舎との関係を失った。奈良貴族と平安貴族のもっとも違うのがその点で、名実ともに貴族となったのは平安京においてである。

都市民となった貴族のあらたな生活源は、役所から支給される給与である。その給与が「代耕（だいこう）の禄（ろく）」－（田舎で）田畑を耕すかわりに（役所から）与えられる給料の意－と称された理由である。貴族とはみずからその根を断ち切り、帰るべき故郷を捨てた人たちのことといってよい。

存在形態の違いは、かれらの意識をも変えた。田舎（鄙）を蔑視し、生産を卑しいと見る意識が、奈良時代に比し平安時代に顕著になったのがそれで、都市貴族となることで生み出された、まさしく貴族の意識に他ならない。

しかし平安京では10世紀以後、役所の制度がゆるみ、給与の遅配・支配も起こりはじめる。かつて帰るべき故郷・田舎を捨てた貴族は、古代末期には零落の生活に陥りはじめている。日本の支配層を構成した貴族の存在基盤はまことに脆弱なものであった。しかも古代末期には、公家たちが勤めるべき役所の大半が大内裏から消えていった。平安京の北部に位置する大内裏には天皇の居所である内裏と、その周辺に多数の役所が立ち並び、全体として古代国家の中枢を形成していた。その大内裏の崩壊過程[5]を詳しく辿ることは困難だが、12世紀末から13世紀

にかけて、あらかた廃絶する。役所から支給される給与で生活してきた公家が零落を余儀なくされたことはいうまでもない。

こうして貴族（公家）は全国支配の拠点を失い、政治力も経済力も失った上、武家にその立場を奪われる。没落する公家が、それでも中世を生き延びることが出来たのは何故か。それは、すがりつくことの出来る天皇の権威が依然として保たれていたことにある。もともと公家は「公家衆」として天皇と運命共同体であったが、中世以後、その様相はますます顕著となる。中世の公家は交替制で出仕し、朝廷における年中行事に奉仕することや、古典の書写[6]に従うなどの他は、さしたる公的な仕事もなくなった。

この点に関連して、(a) 中世の公家のなかには和歌や音楽などの芸能を家業として伝え、それを教授することで生活源とするものがいたこと、(b) 古典への関心を抱き、公家に和歌の添削や古典の書写を依頼する地方の武家が少なくなかったこと、により、古典が都市や地方へ広がった事実にも留意しておきたい。

しかし、中世以後でも天皇の権威が保たれ、それによって公家も存続することが出来た根本的な理由は、王権が他ならぬ武家によって支えられるという政治構造が生まれていたことにある。そこで考察の対象を天皇に移そう。

天皇（制）ないし日本の王権に関してはまず論ずべき問題が多々あるが、古くて新しいテーマは、なぜ皇統が古代から今日に至るまで続いたのか、という理由の解明である。どこにその謎が隠されているのか。

私はそれを、「譲位」の発見に求めたい。

日本における王権の継承には、７世紀末まで次の二つの原則があった（村井「王権の継受－不改常典をめぐって－」『日本研究』１、1989年）。

(1) 在位中の天皇は皇位を譲ることは出来ない。

(2) 30歳以下の年少者の即位は認めない。

ともに執政者としての基本条件であった。この原則を破ったのが持統天皇（女帝）である。その経緯は省略するが、他のライバルを排除し、孫に皇位を継承するために、みずから譲位し、「共治」するという条件で、時に15歳であった珂瑠皇子（文武天皇）の即位を実現した。698年のことである。

これをきっかけとして、以後譲位の慣例化が進んだが、この譲位を重視するのは、以下の理由による。

第一は、天皇と上皇という、王権の二重構造が生まれたことにある。上皇は自由な立場で権力のもつ、いわば暴力的、非道徳的な要素を受け持ち、それを発散することで、天皇の聖性・権威を保証する役割を果たしたのである。これを王権の柔構造と呼ぶなら、これが皇位の持続性をもたらした大きな理由といってよい。

第二は、譲位による「天皇－上皇」という二重構造は、王権が持つ「権威」と「権力」の分化をもたらしただけでなく、当初上皇が受け持った権力の部分を、その後も時々の政治権力者がになうという構図を生んだことである。摂関政治下では藤原摂関家が、院政下では上皇（院）が分担したが、注目すべきことは、中世に下り、鎌倉幕府の成立後は幕府、つまり武家が受け

持つようになったという事実[7]である。鎌倉幕府の滅亡後は室町幕府が、その滅亡後は織田信長・豊臣秀吉そして江戸幕府へと引き継がれた。

結論を急ぐなら、こうして日本の王権は、その権力部分を時々の政治的実力者が掌握し行使することで、天皇の権威を保証する構造が出来上がった。王権の、権威と権力への分化と相互補完の関係が、王権の永続性を保証したのである。天皇はもとより公家も、江戸幕府の成立により蘇生した理由である。

注

1　このうち「公家」は、本来「こうけ」とよみ、天皇もしくは朝廷のことを指したが、それに仕える者たちの総称＝「公家（の）衆」も、略して公家と書き、「くげ」と呼んだ。「公卿」（くぎょう）と混同・混用されることが多いが、この方は大臣など高級官職に任じられる者たちをいう。公家の呼称は一般的には中世になって登場する「武家（衆）」に対応する概念として用いられ、古代は「貴族」（５位以上の有位者）の語を用いることで時代的なニュアンスを表すのが普通である。本報告でも適宜使い分けるが、原義に即していえば、古代に公家、中世に貴族の語を用いて間違いというものでもない。

2　ちなみに平安中期、10世紀に用いられるようになる言葉（和語）－「やまとごころ（大和心）」は、「漢才」（中国の学問・教養を身につけていること）に対するもので、日本人の民族意識を、直接的に表現した言葉のように受け取られがちだが（後世、その方向で極端化して用いられたこともあったが）、日本人が得意とした（漢才＝学問よりも）日常生活における現実的な処理能力、処世術にたけていたことを表した言葉である。当然民族の違いといった認識があって生まれた言葉ではあるが、こうした日本人自身の自己認識もしくは資質は、民族意識の高揚には向かわず、むしろ受容した異文化－思想も制度も生活レベルのもの、時には風俗に変容してしまう、つまりは民族意識とは無縁の世界を作り出したように思われる。このことは本課題の解明に無関係ではない。

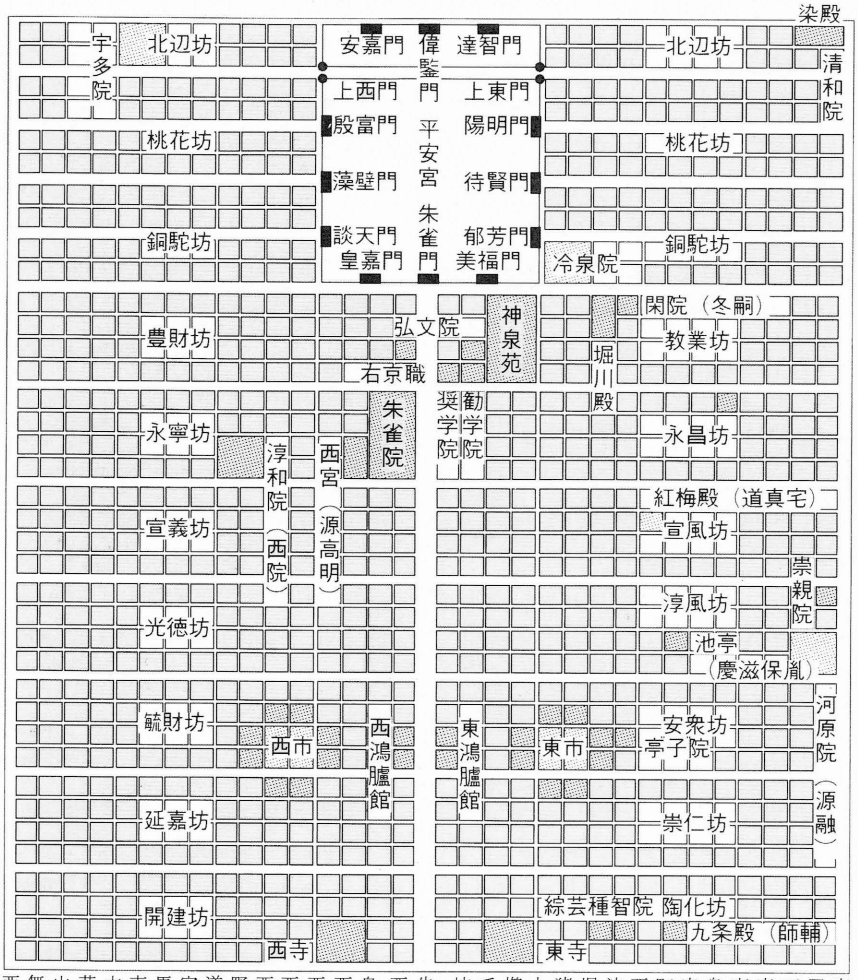
3　９世紀を通じて行われた役所の統廃合で大半の役所は宮内・中務の二省に吸収されており、その目的が全体として内廷関係の役所の充実、整備にあったことを示している。この傾向はその後も強まり、天皇の家産体制、家政機構に基づく宮廷政治に矮小化されていく（村井・瀧浪貞子『陽明文庫本宮城図・解説』1996年）。

4　遷都は、推進者が新しい政治秩序・支配体制をつくり出すための、もっとも強力で実効ある政治行為であった。根回しなどにより、遷都が決定的となった時、遷都という名のバスに乗り遅れたものは、没落する以外に道はなかった。このような遷都のもつ力を、私は「遷都の政治力学」と呼んでいる（村井「『古京年代記』1973年」）。

5　大内裏の中にあった役所の廃絶する過程は詳らかでないが、13世紀はじめの大火で事実上廃絶し、一帯は荒れ野原となった。牛馬が放牧され、人の死骸が捨てられる場所にもなっている。そこでここは「内野(うちの)」と称されるようになる。ただし役所のうち太政官と神祇官だけは室町時代、15世紀でも残されている。太政官と神祇官といえば、古代国家の中心に位置付けられた二つの役所である。衰えたりとはいえ、古代国家の象徴として、意図的に残していたのである。

6 古典－『伊勢物語』や『源氏物語』などの書写そのものは創造的行為とはいえないが、それを用いての中世の公家による古典研究とあいまって、近世における国学発展の土壌となった。その意味で中世の公家たちの仕事はもっと評価されてよい。

7　この点は、現在の京都御苑にある内裏の造営に典型的な事例を見ることが出来よう。鎌倉初期（13世紀初め）、朝廷から内裏の修造を依頼された源頼朝は、その要請に応じて早速修造している。これを最初として、内裏の造営は武家の行うべきものとなった。信長の上洛の目的の一つは内裏修造にあり、その内裏を秀吉は解体してあらたに造営、それを家康は解体して新造、それを家光が解体してあらたに造営した。それ以後は焼失したときに限られたが、幕末に至るまで幕府の仕事であった。現在の建物も同様である。



一条大路12(丈)
正親町小路4
上御門大路10
鷹司小路4
近衛大路10
勘解由小路4
中御門大路10
春日小路4
大炊御門小路10
冷泉小路4
二条大字17
押小路4
三条坊門小路4
姉小路4
三条大路8
六角小路4
四条坊門小路4
錦小路4
四条大路8
綾小路4
五条坊門小路4
高辻小路4
五条大路8
樋口小路4
六条坊門小路4
楊梅小路4
六条大路8
左女牛小路4
七条坊門小路4
北小路4
七条大路8
塩小路4
八条坊門小路4
梅小路4
八条大路8
針小路4
九条坊門小路4
信濃小路4
九条大路12

西京極大路10
無差小路4
山小路4
菖蒲小路4
木辻大路8
恵止利小路4
馬代小路4
宇多小路4
道祖大路8
野寺小路4
西堀川小路12
西靭負小路4
西大宮大路12
西櫛笥大路4
皇嘉門大路10
西坊城小路4
朱雀大路28
坊城小路4
壬生大路10
櫛笥小路4
大宮大路12
猪隈小路4
堀川小路12
油小路4
西洞院大路8
町尻小路4
室町小路4
鳥丸小路4
東洞院大路8
高倉小路4
万里小路4
冨小路4
東京極楽大路10

京　中　図

【Abstact】

Tennoh (Emperor), Courtiers, and Warriors

MURAI Yasuhiko

Tennoh (Emperor), courtiers, and the warriors have formed the ruling class of the Japanese society over a long history. In ancient history the courtiers and starting with the medieval history the warriors have played the central role in politics, yet in both cases the presence of the Tennoh (emperors) was an important factor.

The Courtiers were the urban aristocrats concentrated in the Miyako (the capital). The development of the capital appeared in the form of the expansion and maintenance of the Dairi (the Imperial Palace) where the Emperor resided, and of the government office facilities that formed the center of the state sovereignty, and the courtiers used to reside in that capital as the public servants of the state. The courtiers would live as urban citizens, separated from their home-towns, and would receive public salaries on which they would live.

This system, which was established in eighth century, faced collapse after tenth century. By the thirteenth century the warriors, who established territories for themselves in the provinces, and based on their martial functions, appears as the main political actors.

However the courtiers did not disappear altogether and managed to live up to modern times. This is one point that starkly differs from the European society. There are two reasons for this: First, courtiers were the carriers of the classical culture, and being so they were socially accepted with their role as the teachers and commentators on issues such as waka, or "*genji monogatari*". Second reason was their deep connection with the imperial authority.

It is an enigma why the Tennoh system has lasted till today over more than a two thousand years of history, and without interruption or change. One of the secrets of this fact is the "abdication" system in which Tennoh would live his throne to his successor during his lifetime. This brought about a double structured regal power where the authority is divided among the retired Emperor (*joko*) and the reigning Emperor.

As a result, actual political authority would be invested in the *joko*, and the reigning Emperor would become a hollow existence without any authority or political duties, but rather become a sacred existence receiving people's adoration.

In contrast to this existence, actual authority and political duties were initially invested in the retired Emperors, and then gradually were seized by the Fujiwara family as regents (*sessho, kampaku*). Still later, the warriors established the bakufu with the shogun on its top, and this bakufu came to manage the politics of the state.

These divisions in the regal authority structure, and the interlocking relation with the courtiers and warriors have helped the Tennoh system last long.